

第3章 初期キリスト教はいかにして 組織制度偏重に陥ったか（2）

（続き）

イエスを亡き者とせねば、と 時の宗教指導者たちが意を決したのは、これらイエスの活動が衝撃的なものだったからである。イエスの主張される権威と、イエスが示される道に全き従順をもって従うようにとの その呼びかけ。それらは、彼らの伝統的体制と相いれなかった。どちらかが姿を消さねばならなかった。そこで、彼ら・宗教指導者らは人々を煽動し、イエスを殺すようにと 大声で要求させた。そして、二人の強盗の間に挟むようにして、イエスを釘で十字架に打ち付けたのである。彼らはこうして、運動の主導者を十字架につけた。がしかし、イエスが始められた その運動が頓挫させられることはありえなかった。男性も女性も イエスのためなら死をもよしとする者たちがいて、その心と生き様との内に 運動が息づいていたからである。

事は、取るに足らない属州から、蔑まれた民族から始まった。それは主として、ほんのひと握りの無学な者たちによって宣べ伝えられた。異教社会を象徴するものに対しては、それが何であれ、これに立ち向かった。そして、信じがたいほどの迫害に耐えた。こうして、キリスト教の運動は多くの障害に直面した。しかし、神への信仰はもはや、知的な同意でもなければ、従順な振る舞いといった問題でもなかった。信仰は今や、生き生きとしたいのちの経験として、そのような事柄としてあった。そして、ローマ帝国の力も、またサタンの企みも、これに打ち勝つことはできなかった。そこには たしかに、集会もあれば、各種の形式や儀式もあった。しかしながら、それらはまさに、深い内的経験を外的に表現したものにすぎなかった。キリスト教信仰は、キリストの内におられる その神との経験的な関係に基づいていたのである。

迫害は実際、激しく容赦のないもので、このキリスト教の運動が始まって さして経たぬうちに、運動に加わる者たちに向け、その手が下された。既存の宗教体制が脅かされたからである。しかし、初期のキリスト者たちは 揺るぎない確信のもと、時の宗教的・政治的指導者らには理解しがたい様をもって、これら自らに敵する人たちに対したのだった。彼らの内にあつたのは、「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません」（使徒言行録 5：29）との確信だった。内なる心に抑えがたく迫る思いで、「わたしたちは、見たことや聞いたことを話さないではいられないのです」（同 4：20）と 彼らに言わせたのもそれだった。それゆえ、迫害のただ中にあつても、「散らされて行った人たちは、御言を宣べ伝えながら、めぐり歩いた」（同 8：4〔口語訳〕⁽¹⁾）のである。こうして、殉教者の流した血が 実に、教会の種となつていった。

組織制度 発達す

地上におけるその働きを通し、^{あがな}贖われた者たちの共同体として、キリストは教会を建てられた。そして、この世における神の贖罪^{しよくざい}の目的に仕える器となるよう、その教会の人々に 務めを託された。〔こうして始まった〕初期キリスト教の運動は、耐えがたいほどの敵対にもかかわらず、急速に拡大するところとなった。そうしたなか、この共同体はキリストの霊に導かれ、それなりの組織や制度を発達させるようになる。運動で手にした価値ある在り方を維持するためであり、また それを広めるためだった。教会はその初め、様々な信者の家^{いえ}に集って、^{つど}交わりをもち、教えをなし、そして簡素な礼拝をまもった。が、その礼拝もこうして、結果的に より明確な形式に従うようになる。すなわち、礼拝の初めの部分については「主に忠実な (faithful)」者たちと共に 求道者らもそこに出席することを許されたが、ある時点で 彼らは退席するように求められ、主に忠実な人々だけが礼拝^{とど}に留まることとされたのだった。

〔入信時のことに関して言えば〕使徒時代は、キリスト教への回心者の大部分がユダヤ人か もしくはユダヤ教からの改宗者で、すでに旧約聖書の教えをよく知る人たちだった。このため、彼らのごく短い教育だけで、また「イエス・キリストは主なり」との単純な信仰告白でもって バプテスマを受け、教会に受け入れられた。しかしながら、2世紀、3世紀に 異教徒の間から回心者が多く出、その数が増すにつれ、教会内の一致や純粋性を、また諸理解を強固にするため、バプテスマの志願者らにより長期かつ広範な教育を行なうのが賢明と考えられた。異教の信仰を離れて 新たな信仰へと移ったばかりの彼ら 元・異教徒たちは通常、新しい生き方について 背景を知ることはほとんどなく、規範的な在り方についても同様だった。彼らのそれまでの背景は 実際、多神教的で、道徳的とも言いがたいものだった。彼らは何もかもを、改めて学ばねばならなかった。そこで 諸教会が考え発展させたのが、基礎教育として知られる、洗礼志願者の準備教育だった。こうして、ユダヤ人も異教徒も、またキリスト者の子どもたちも皆、この教育を受けることが求められ、それをして初めて、教会の一員として その交わりに完全に受け入れられるところとなった。初期の教会は この洗礼志願者教育を通し、教会員の新生者たることを確かにし、そのキリスト教運動を支える信仰と教義の原理原則が保持され、実践されることを確実にしようとしたのだった。

しかも、この教育は単なる知的理解を目指すものでもなければ、教会の諸形式や儀式に適切に関わられるようにするものでもなかった。クリスチャンが教会で また社会で生きる まさにその生き^い様^{さま}が、キリスト者になるとはいかなることか、それを 求道者に〔身をもって〕示すことになるからだった。加えて、この教育は、〔自分がキリスト者になることによって〕何を手放そうとしているのか、そしてそれに代え〔自身の生きる基本に〕何を据えようとしているのか、それらを 教育を受ける志願者たちが理解する助けともなった。新たな「道 (way)」を行くには 新たな忠実と姿勢の転換が必要で、新しい生き方が求められた。こうした教育がバプテスマに先立ってなされたのである。それは、ジョン・フレッチャー・ハースト (John Fletcher Hurst) ^② も指摘するように、各人が「学ぶべきこと (lessons)」を経験的・生活的に確かに学び取れるよう その一助として行なわれたもので、教会の交わりに完全に受け入れられるまで、その確認期間として 最長3年間続く場合もあった。¹ 彼らの知識が試されたのではない。生活の有りようが、そこで見て取られたのである。

組織制度の偏重へ

こうしたなか、異端も出現し、その数が増加。これを受け、信仰を純粹に保持することが極めて重要なところとなった。しかし、いかにしてそれをなすべきか。真理と誤謬^{ごびゅう}を見分けるに、誰が最も適格か。大きな都市教会の司教から選ぶほか、実際、誰がいると言えよう。周辺地域の伝道拠点としてあった教会である。が、ならば どの司教か。初期の教会にも、司教は複数いたのだ。そうしたなか、結果的に、献身度、生来の才、指導性の質といった特質の効により、そのうちの一人が頂点に立つようになる。こうして、2世紀には そのような人物が主司教として知られるようになるが、正統と異端を見極めるのに、論理的にも また自然な推移としても、そうした主司教以上に その選択がありえたらうか。主司教こそ、信仰のことを 他の誰よりもよく知っているはずではないか。このようにして、この主司教の手に、信仰認証の責務が委ねられるに至ったのである。その承認なしには、誰も 教会の一員になることはできなかつた。²

と同時に、教会員の純粹な信仰保持が大事^{だいじ}だとしたら、説教をする者や教える者についてはなおのこと、信仰の純粹な者たちをのみ、教会がその務めに任ずることが重要になる。であれば 再び、誰がこの重大な責任を負うにふさわしい人物か。主司教以上に適格な者がいるだろうか、となり、それゆえ、この任職権もまた、時とともに 主司教に当てがわれることとなった。こうして、教会の一員になりたいと願う者も、また教会の務めに任職されたいと願う若者も、自身の教義理解がこの主司教に不快感を与えたり その非難を招くことがないよう、確実にせねばならなくなつたのである。そこに否定しがたくあつたのは、信仰の純粹性が保たれねばならぬことと、そのためにはおそらくは〔上述のようにして各地で生まれた〕主司教らこそが最善の適格者と考えられる、ということだつた。とはいへ、ここに、中央集権的な権威へと向かう その第一歩が見て取れよう。

加えて、当時、誰かしかがクリスチャンになると、正統派のユダヤ人たちはたびたび、その人の商売を皆で排斥した。それが労働者の場合、働き口をくれる人が一人も見つからなくなつた。このように、初期のキリスト教会では、多くの教会員が深刻な経済的困窮に直面していた。さらには、巡回伝道者たちに財的支援が必要なことも少なくなかつた。そうしたなか、これらの必要や類似のそれらに 応えるため、諸教会は 困難のうちにある人々とその荷を共に負合つた。そのために、特別な献金が募られた。こうして じき、上記のような緊急時に備えた資金が蓄積されたのだつた。

(続く)

注

1. John Fletcher Hurst, *History of the Christian Church* (New York: Eaton and Mains, 1897) I: 342-44.
2. Ignatius, *Epistle to the Smyrnaeans*. Quoted in Henry Bettenson (ed.), *Documents of the*

Christian Church (New York: Oxford University Press, 1947) 89-90.

訳注

- (1) [] 書きは、訳者の補筆挿入。
- (2) アメリカ メソジスト監督教会の神学者。1834～1903 年。ドイツとアメリカで、組織神学、歴史神学の教授を務めた。後年、アメリカ ドルー神学校の学長も歴任。

(矢野 眞実訳)